

県立図書館だより

平成30年2月

青森県立図書館報 第30号

＼ ご利用ください！ 新しくなった ／

青森県立図書館デジタルアーカイブ



掲載資料の例。左から順に『袖裡珍便津軽三郡行程記』、『合浦外浜名勝』（善知鳥）、『大日本国東山道陸奥州駅路図[3]』、『青森町内、弘前町内写真』（弘前本町五丁目）、『引札：芝田商店[2]』

当館が所蔵する貴重な郷土資料等の保存と活用を目的として、平成27年9月に開設した「青森県立図書館デジタルアーカイブ」

(<https://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/digital/>)。

パソコンやスマートフォン等により、時と場所を問わず貴重な資料を見ることができるこのサービスが、先頃リニューアルされました。一体どんなところが変わったのかというと……

~~~~~

### 目 次

|                                     |      |
|-------------------------------------|------|
| ご利用ください！新しくなった青森県立図書館デジタルアーカイブ…………… | 1～2  |
| こんなレファレンスがありました……………                | 3～10 |
| こどものひろば……………                        | 11   |
| ご存じですか？この資料……………                    | 12   |
| ようこそ文学館へ！……………                      | 13   |
| カウンターからひとこと……………                    | 14   |

## 1 資料が探しやすくなりました！

資料リストの絞り込みや並べ替えができるようになったため、目的の資料を探し出しやすくなりました。

## 2 画像が見やすくなりました！

画像をウェブブラウザ上でスムーズに拡大・縮小・回転できるようになりました。また、今回新たに追加した資料は、細部まで見やすい**高解像度フルカラー画像**となっています。



リニューアル前

リニューアル後

ウェブブラウザ上で画像を拡大し、細部まで確認できるようになった。

## 3 資料が使いやすくなりました！

画像の利用条件（CC ライセンス）を明示したことにより、当館への**利用申請が不要**となりました。特に、著作権保護期間の満了した資料（パブリック・ドメイン）については、自由に利用することができます（ただし、著作者人格権・肖像権等にご注意ください）。

## 4 資料もリンクも増えました！

新たに **32 点** の当館所蔵資料を追加し、**計 96 点** の資料が利用できるようになりました。

また、既存の「デジタル化資料リンク集」（青森県に関するデジタル化資料のリンク集）に加え、新たに「デジタルアーカイブリンク集」（公共図書館などのデジタルアーカイブへのリンク集）を作成しました。

\* \* \* \* \*

この「青森県立図書館デジタルアーカイブ」、実は他の業務に使用するサーバーの一部を間借りして当館職員が手作りしたものです。このため、他のデジタルアーカイブに比べて機能や掲載資料数等の点で不足している部分もありますが、今後も貴重な郷土資料等のデジタル化を進めるとともに、それらが有効に活用されるよう取り組みを進めていきます。

**新装「青森県立図書館デジタルアーカイブ」、ぜひご利用ください！**



～ こんなレファレンスがありました ～

【第27回】

## 故郷(ふるさと)の話題読み語り 「“謎の津軽藩医師”樋口道興は二人いた？」



今年の3月13日で、青函連絡船終航、青函トンネル開業から30年となります。

多くの人達の人生と共に津軽海峡を往復していた連絡船、終航から四半世紀を過ぎ、青森県の人口の約25%が30歳以下となっている今、乗船したことがあり、思い出として語る方も少なくなっていることでしょう。寂しいかぎりです。

青函連絡船の歴史では、戦争や洞爺丸の転覆といった悲しい出来事もあります。それらを教訓として語り継ぐため、当館所蔵の関連書籍を大切に保存していきたいと思います。

さて今回の話題は、船の遭難・漂流と朝鮮通信使の記録に纏<sup>まつ</sup>わる津軽藩の医師の話です。

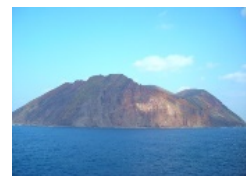
舞台は江戸時代、『図書館だより』第17号(平成25年10月号)のこのコーナーで、「異国漂流奇譚種々」と題し、日本列島周囲の海運による物流が活性化したことで、17世紀以降、海難事故が増加し、「漂流」の時代とも言えるとお伝えした、その頃のお話です。

### 【質 問】

『鳥島漂着物語』(小林郁／著 成山堂書店 2003)に、樋口淳美(号は酔山)という津軽藩に仕えた医師が記した「酔山翁問松兵衛答 無人島談話」が紹介されています。

この「酔山」について、寛政10年にどこに住み、仕えていたのか知りたい。

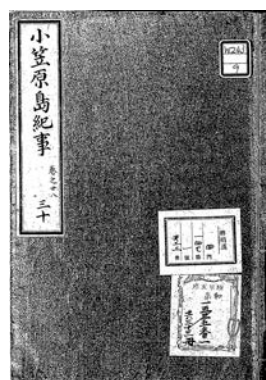
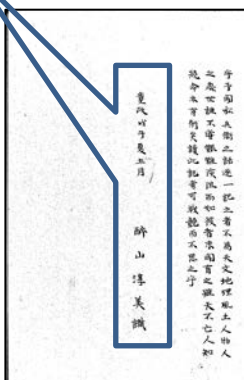
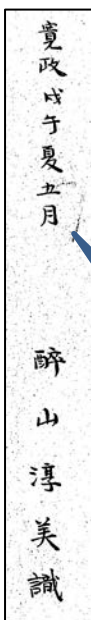
「無人島談話」は、天明5(1785)年から寛政2(1790)年にかけて無人島であった「鳥島」(特別天然記念物アホウドリの生息地として有名な東京都直轄地)に相次いで漂着した土佐、大坂、日向(薩摩領志布志廻船)の船乗りたちが手づくりの船で脱出し、江戸に帰還した話です。



public domain

「無人島談話」という題では、薩摩藩の本草学者・侍医「曾槃(そうはん)」が編纂したものが秀逸で、『石井研堂これくしょん 江戸漂流記総集 第1巻』(日本評論社1992)などに所収されていますが、樋口淳美の「無人島談話」は「島物語」とも云われ、『小笠原島紀事 卷之28』(坂田諸遠編纂)に所収されたものが残っています。

国立国会図書館デジタルコレクション  
(<http://dl.ndl.go.jp/>) で見るができます。





この本の「跋(ばつ)」には、「寛政戊午(つちのえーうま)夏五月 酔山淳美識」とあります。寛政の戊午は、寛政10年、お問い合わせは、酔山が「無人島談話」を書いたとき、どこに住み、どんな身分であったのか知りたいということのようです。

古代から江戸期(正確には慶応3年)までの間に、日本人が著述・編纂・翻訳した書物については、『国書総目録』(補訂版 全9巻<うち索引1> 岩波書店 1989)、著者については、『国書人名辞典』(全5巻<うち補遺・索引1> 岩波書店 1993)



という強い味方が図書館にはあります。

現在では、『国書総目録』と『古典籍総合目録』(岩波書店 1990)が統合され、「日本古典籍総合目録データベース」(<http://basel.nijl.ac.jp/~tkoten/>)として、ネット公開されています。是非、ご覧ください。

『国書人名辞典』を引くと、樋口淳美は、医者、**生没年未詳**、寛政頃の人、そして陸奥津軽藩医、江戸に住すといったことが書かれ、産科医であったことも分かります。

お問い合わせの『鳥島漂着物語』では、『大日本近世史料 編修地誌備用典籍解題六』(東京大学史料編纂所 1979)でも「島物語」が取り上げられていると紹介されています。同書でも、著者を「樋口淳美(号は酔山)」、江戸に住んでいたともあり、同じ人物だと分かります。

この人名辞典をはじめに引くのには理由があります。

昔の、このような書を著すような人たちは、名や号を複数持っているほか、通称或いは幼名などもありますので、一つの名前、号だけを追って探しては探し出せない情報もあるからです。

樋口淳美は、酔山の他にも「**道泉**」「**淡如斎**」という名前も持っていました。

幾つかの名前、号を確認したうえで、『青森県人名大事典』(東奥日報社 1969)『青森県人名事典』(東奥日報社 2002)を引いてみました。

今回は残念ながら、「樋口淳美」については書かれていませんでした。

利用者の方からのご質問には、複数典拠(記述が本当かどうか、複数の資料で確認すること。)で、お答えして終了としました。

---

さて、ここからが、謎の医師に迫っていくお話しのはじまりです。

ここまで紹介した資料の中に、気になる記述が二つあったので、見てみることに…。

一つは、『国書人名辞典』の参考文献で挙げられていた『森銑三著作集 7』です。

森 銑三(もり-せんぞう)氏は、図書館学を修め、東京帝国大学史料編纂所の図書係などをされた、私たち図書館員の先輩であり、在野の歴史学者、書誌学者として数多くの著作を残された方です。

『森銑三著作集 第七卷』(森銑三／著 中央公論社 1989)に収められている「村尾元融伝の研究」の中に、「樋口淳美」は出てきます。

村尾元融(むらおーげんゆう)は江戸後期の考証家で、蛮社の獄(1839)で渡辺崋山救済のために奔走したことや、『続日本紀考証』を著したことで知られています。

【参考：『朝日日本歴史人物事典』(朝日新聞社 1994)】

元融は遠江国(静岡県)浜松の医師村尾董覚の三男で、父董覚のことを記した「董覚先生行状」という一文が収められた文稿が残されています。その中に、

「就杉田玄伯、樋口道泉二翁、而問産科術、」とあります。

二つ目は、先述の『大日本近世史料 編修地誌備用典籍解題 六』の「島物語一卷一冊寫本」の解題中に、“杉田玄白増補”が朱書きされていたという記述です。

『解体新書』で知られる杉田玄白(すぎたーげんぱく)の生没は享保 18(1733)年から文化 14(1817)年、江戸の蘭学医でしたから、寛政期(1789 年から 1801 年)に医師として活躍した道泉(樋口淳美)と親交があったのではないかと推察されます。

玄白は、「鵜齋(いさい)日録」という詳細な日記を残しています。

「鵜齋(いさい)日録」は、『杉田玄白全集 第一巻』(学蔵会／編 生活社 1944)で翻刻、発行され、現在、国立国会図書館デジタルコレクションでも公開されています。

寛政 10 年を見てみると、9 月(小)の 14 日に、左の文章を見つけました。

友人たちが相次いで鬼籍に入ったことへの感を詠った漢詩と共に、病で逝った友人の名を記した中に、道泉の名前があります。『国書人名辞典』では、生没年未詳となっていたましたが、どうやらこの年、9 月に遠くない時期に亡くなったようです。

さて弘前藩では、全国でも稀有な長期に渡る藩の日記が残されています。江戸の藩邸で書かれた「江戸日記」寛文 8 (1668)年から慶応 4 (1868)年と、国元で書かれた「御国日記」寛文元(1661)年から元治元(1864)年で、合計 4,515 冊です。

現在、マイクロフィルム化され、当館でも所蔵があります。

藩医のことですから、日記に書かれているのは間違いないだろうと、今回は、御国日記を見ってみました。すると、寛政 10 年 9 月、江戸からの書状の中にありました。(右写真)

十四日 晴 近所・本町・下谷病用。  
故友陸續上鬼簿有感  
得壽長愁一病夫 近來何事意殊孤  
世間風俗年々變 多少親朋次第無  
夜若殿様御會讀、藤川良節・佐々木担藏・樋口道泉・目黒道琢・近來病近。

一、御近習医者樋口道泉義病氣之处 養生不相叶去ル四日致病死候

「一、御近習医者樋口道泉義病氣之处 養生不相叶去ル四日致病死候」

「無人島談話(島物語)」の跋は、「寛政戊午 夏五月 酔山淳美識」となっていましたから、その僅か数か月後、寛政 10 年 9 月 4 日に亡くなったことになります。

折角、藩日記をみたのですから、道泉がいつ藩医になったのか調べてみました。

道泉は、明和6(1769)年5月、16日に江戸を立った書状(5月27日の日記)の中で、道興の倅である樋口道泉からの願いの通り、表医を仰せ付けたと書かれています。

道興の倅とありますから、「道興」は道泉の父親ということになります。

「樋口道興」も、やはり江戸藩邸の医師だったのでしょうか。

『青森県人名大事典』『青森県人名事典』に、子については触れられていませんでしたが、「樋口道興(ひぐちーみちおき)」に関する記述がありました。

ここで、驚きの記述に気が付きます。

2017年10月31日、「世界の記憶(世界記憶遺産)」に日韓共同で申請していた「朝鮮通信使」に関する資料の登録が認められましたが、なんと道興は、この「朝鮮通信使」と深い関りがあるというのです。

両人名事典では、天和の通信使のとき、病気になった使者の治療にあたり有名になったことで、町医者から津軽藩医に召し抱えられたとなっています。

さらに『青森県人名事典』では、この「天和度の朝鮮通信使」と関りを持った「道興」(仮に、天和の「道興」としましょう。)とは別に、藩医「道興」が存在するというのです。



狩野安信『朝鮮通信使』大英博物館蔵。  
1655年・承応4年・孝宗6年

「朝鮮通信使」は、室町時代に、幕府の将軍からの使者に対する高麗王朝の返礼に始まる外交使節です。

一時中断した時期もありますが、江戸時代に再開され、将軍の代替わりなどに際して幕府の要請によって、朝鮮王朝が派遣をしました。通信使は、対馬を経由し、江戸まで、天和の時には日光まで上の絵のような行列を組んで移動し、時の将軍に会うという一大イベントでした。通信使もそうですが、受け入れる側も大変な準備を要するもので、その対応の詳細な記録が残され、研究された書籍も数多く出版されています。

使者が病気になり治療をしたとなれば、大事件です。

ところが、両人名事典には詳細な記述はなく、研究書をどんなに見ても、そのような事実は書かれていないのです。それどころか、この天和の通信使のときには、東洋医学に関心をもっていた幕府が、朝鮮王朝に依頼して、三名の高名な医者を招聘しているのです。

しかも江戸では、対馬藩主が病気を発したので、鄭という医師が、もう一人の医師をひきいて往診したという記録まで残っています。

【参考】右写真 『東槎録』(洪禹載著 江戸時代第七次(天和二)朝鮮通信使の記録)天和2年9月1日

「島主有病請鄭医、李碩麟率往」(傍線部分)

※『東槎録』は、各度の通信使の時に書かれています。

九月十一日 朝鮮通信使 行望 關禮島主有病請鄭醫李碩麟率往○  
各處禮單子終日看書○安判事洪 關禮島主有病請鄭醫李碩麟率往○  
單子物有差等而還到本島以給之 洪 關禮島主有病請鄭醫李碩麟率往○  
初二日 晴 留江戶三堂具公服與平眞并五兩官 洪 關禮島主有病請鄭醫李碩麟率往○  
等五人 家到大門下橋步殿行至屏梯則着冠帶者三人出迎相揖首堂奉持書



果たして日本の医師が、使者を治療することなどあったのか疑問です。

両人名事典ともに、典拠資料は当時の記録ではありませんでした。

年代が違っているのではないかと、もう一人の「道興」の活躍した時代で可能性のある延享5(1748)年の通信使に関する資料を見ました。

そこには何と、「樋口道興」の名前があるではないですか。

しかも、案内役の対馬藩が、幕府によって責罰される虞(おそれ)もあった大事件の中で、です。

延享5年4月26日 大坂での出来事、火砲手が火薬の搗き晒しをしているときに誤って爆発させ、重傷者5名を含む80名以上が怪我をするという大事故となります。

当時の通信使の記録『奉使日本時間見録』(右写真)には、桶を使って消火にあたったこと(①)や、千余人が防火服で駆け付けたこと(②)が記されていて、大騒ぎになった様子が分かります。

また、対馬藩の責罰に触れ、「爛傷」の二文字を用いないこと(③)も書かれています。

この時、対馬藩から派遣された医師こそが、樋口道興(仮に、「延享の道興」としましょう。)だったのです。その治療の記録は『延享信使記録』に詳細に残っていて、煎薬、膏薬などの数量まで記録されているそうです。この史料は現在、慶應義塾大学付属図書館で、貴重史料として保存されていますが、デジタル資料として公開されていないので、申しわけありませんが、今回は、ご覧いただけません。

二十七日庚辰午後雨留大坂城館伴末問候上房火砲手搗晒火薬之際誤觸火氣延燒其所寓之屋 ① 驚慌倭聲如沸倭之禁大軍頃刻未集着金衣金胃列整 丁上火屋如赴樂地各所鉤毀手脚使勇又以小桶貯水擲上擲下狀如飛梭自太守以下皆 ② 火服未救者凡千餘人不至死及旋即撲滅而蓋倭屋之制 ③ 主役而皆以板木造成故火起不能救而大患亦頻數故禁火之具無不備矣其法雖行路之人見火災處則不敢過而勇爭先必往救焉滅之則有重賞而爭於竹片書名伸之火滅處而求頭其 ③ 以見兵制亦可想焉斷裁判末謂首譯曰此家人希則護行島主將有責罰爛傷二字願勿宣播云館伴及島主皆有問候館伴以首譯告曰渠之曾祖曾為乙未信行時館伴受得使臣筆跡至今珍藏家中今番又得三使大人之筆伴繼前事以修後觀云三使以回還時書副之意答之初得見京信始聞禮畢早夢之充數入末者特出 聖上曲軫賤臣幸奉命禮重瞻望北天相對感泣而已書信之自京發送在於今月初八自東萊發送在於今月十五而十二日間連及大坂飛船之神速可知矣

※ 記録が書かれたのは27日ですが、事故の発生は26日です。

しかし、延享の道興自身が『韓客治驗』という一書を残していて、版本として現存し、デジタル資料で、ご覧いただけます。

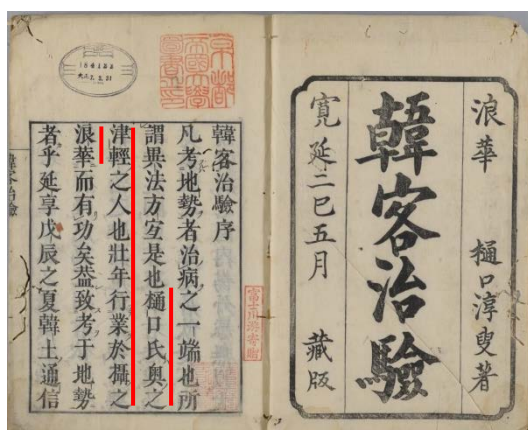
(左写真 京都大学 富士川文庫所蔵本)

<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/>

※富士川文庫は、医学史を専門とされていた医学・文学博士の富士川游氏が寄贈された、氏の旧蔵書4,340余部9,000余冊の集書です。

本書は、道興が治療した負傷者各人の姓名、職、年齢、ケガの状況と治療内容などが中心ですが、巻末には朝鮮の随行医との朝鮮人参に関する問答なども収められています。

序は、大坂の儒医(儒学を修めた人・儒者であり医者であった人)田中牧齋素行が書いて



いて「樋口氏奥之津軽之人也壯年行業於摂之浪華」（朱傍線）とありますので、延享の道興が津軽の人で、壮年になってから大坂に行ったことが分かります。

さて、道興がこの事件に関わったことが、如何に大きな出来事であったのか、ということもこの本で分かります。

朝鮮通信使一行は、「正・副使」「従事官」の三使以下「上々官」「軍官」「医師」「通訳」をはじめとした 500 名程で編成されていました。

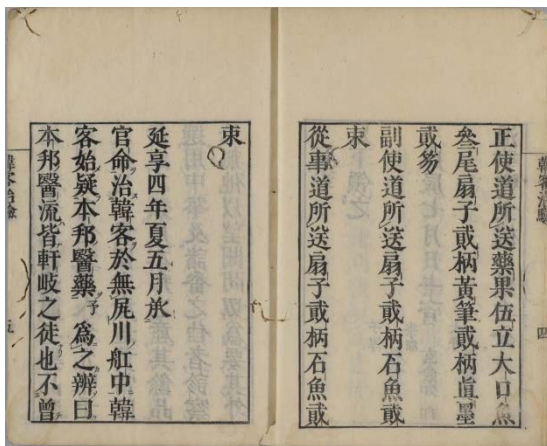
※国立公文書館デジタルアーカイブ 「韓使服儀」

<https://www.digital.archives.go.jp/DAS/pickup/view/category/categoryArchives/0200000000/0202060000/01>



「韓使服儀」 国立公文書館  
デジタルアーカイブ  
「上々官の服装」文化8(1811)  
年と推定できるそうです。

道興が負傷者の治療にあたっていた時、三使一行は将軍に接見のため江戸に行っていました。後にその功績を知り、上々官の感謝の書簡と、三使からの謝物として大口魚・扇子などを贈っています。その書簡も本書の初めに掲げてあります。



さて再び、『青森県人名大事典』『青森県人名事典』の道興に関する記述の疑問です。

両事典共に、天和の道興が通信使を治療したことで有名になって、藩医として召し抱えられたとありますが、有名になったどころか史実が一切出てこないことは、冒頭でお話ししたとおりです。

『青森県人名事典』では、宝暦8(1758)年に“津軽の町医”から召し抱えられたと、もう一人の道興についても書かれています。

この道興が、天和の道興と異なるのであれば、その医師こそ、この延享の通信使随員の、火薬火災で負傷した人たちを治療した延享の道興なのではないでしょうか。しかし、事件に関わったことに触れられていないのは大きな疑問です。

確かに宝暦8(1758)年に、道興なる人物は、右の写真(御国日記)のとおり表医になっています。

「一、町医樋口道興(与)儀 一昨朔日金式枚四人扶持被下置之表医被召出候」

しかし、“津軽の町医”ではありません。

この御国日記は、宝暦8年4月15日に書かれたもので、或る研究資料では、同日に国元で召し抱えられたかのような記述がされていますが、この記録は、当月4日に江戸を立った飛脚によって12日振りに届けられた書状の一つとして書かれたも

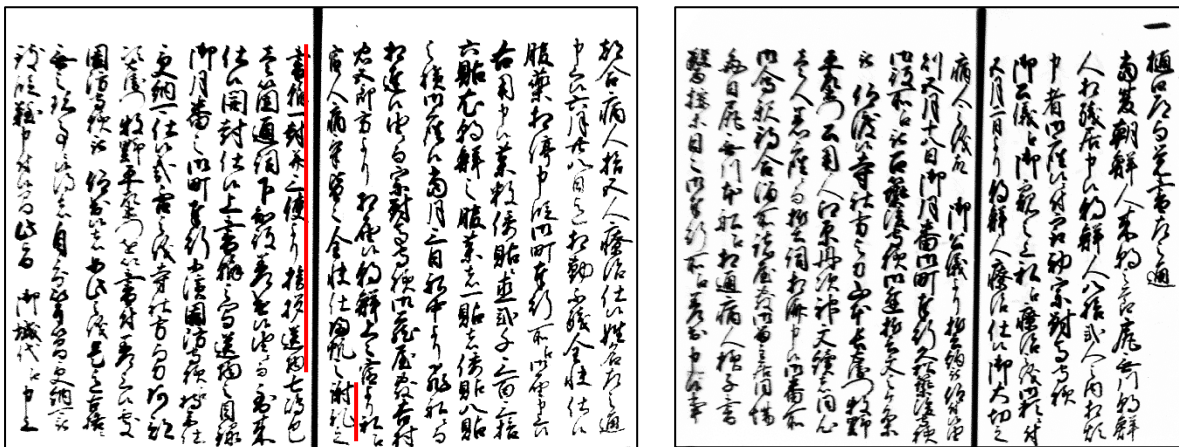
一町医樋口道興は、昨朔日金式枚四人扶持被下置之表医被召出候



のです。即ち、所収する資料では「江戸より」と文頭に付け、「江戸の町医」と解するのが良いのではないのでしょうか。

そして延享の道興は、『韓客治験』で「樋口淳叟」という名前を使っています。樋口道泉の名は「淳美」でした。同じ「淳」の字を使い、同じく江戸詰めの医師、召し抱えの記録「道興倅」からも親子であると考えられます。

もう一つの疑問、朝鮮通信使随員の治療を行ったといった事実を、藩がどのように知ったのかということです。天和の朝鮮通信使のときの道興については、両事典とも「有名になって」としか書かれていませんが、延享5年の道興については、大坂の町医でありながら、津軽の人ということからか、その年のうちに、国元に報告がされています。



上の写真は、『御国日記』延享5年10月16日のもので、3日に江戸を立った飛脚が届けた書状の一つとして「樋口道興覚書左之通」（冒頭部分のみ）と、朝鮮の人たちの治療を行った経緯と、その御礼の書状を受け取ったこと（朱書傍線）など報告されています。

朝鮮通信使に関係する大事件だったのですから、このような覚書を藩に出し、記録が残されていることが、当然のことに思えます。

ではいったい、天和の道興の話は、何を出典としているのでしょうか？

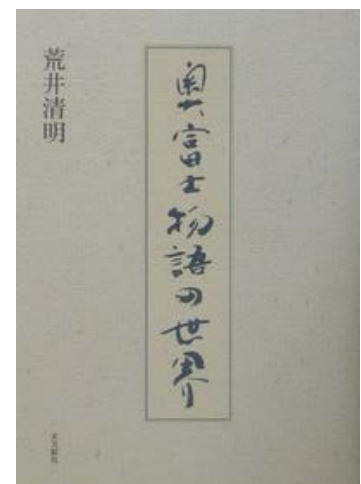
両人名事典の参考資料を確認したところ『青森県史』『青森県教育史』『弘前市史』と、書かれています。それらに書かれている記述の基は、『奥富士物語』です。

『奥富士物語』は、藤原通麿が4代藩主津軽信政時代；明暦2（1656）年から宝永7（1710）年の事績を明和2（1765）年に記したものとされています。

（参考；『奥富士物語 上巻』青森県叢書第八編 青森県立図書館・青森県叢書刊行会 1954）

該当の記述は、上記参考文献の『奥富士物語 上巻』p136, 137にあります。読み下しや注釈がありませんので、大変読み辛いと思います。ご覧になる場合には、『奥富士物語の世界』（荒井清明／著 北方新社 2001）を、お勧めします。

その内容を見てみると、確かに天和の通信使の時に、三使の内の一人が病気になり、いろいろ治療したけれども薬効なく重篤になった。そのため、江戸中の医者をも乗る者を集め意見を求めた際、末席にいた道興が、薬の調合を変えるように進言したことで快方に向かい、ついに全快したとあります。



この時集まった医者は、千人ほどにもなったと書かれています。

三使の内の一とありますから、正・副使或いは従事官です。随員のケガの比ではない大事件です。そのことで道興の名は有名になり、藩主信政もそのことを聞き、金貳枚四人扶持で召し抱えられることになったと書かれています。

金貳枚四人扶持というのは、宝暦8(1758)年に召し抱えられた延享の道興と同じです。偶然でしょうか。

更に、『青森県人名大事典』では天和の道興の著書として『漢客治験』が紹介されています。確かにこの『奥富士物語』に、「或いは云う『漢客治験』という書を著わしたる人と云う」と書かれています。

この『奥富士物語』の道興の行は、「藤田形右衛門道隆(御小納戸)物語に・・・。」とはじまります。藩の日記や記録によるものではないのです。

『奥富士物語の世界』の著者 荒井清明先生も「あとがき」で書かれています。『奥富士物語』には「或る老人の云ふ」など、他の文書にはない逸話が多く面白いのですが、朝鮮通信使、しかも三使の病気で、千人もの医者を集めたことなど、「逸話」となるものでしょうか。さらに、この『奥富士物語』が成立したのは『韓客治験』の出版から16年後、如何に江戸詰めとは言え、道興は既に藩医になってからのことです。

信政公の事績に話題を加えたかったものか、或いは、単に情報が伝わっていなかったのか、どの様に考えても、“物語に・・・”は、『韓客治験』に記された一件の訛伝(かでん)であり、『韓客治験』そのものに違いありません。

また当時は「漢」の字を充て『韓客治験』を『漢客治験』と言い伝えても、何ら不思議のない時代です。



甲賀文麗作「上田秋成像」  
(public domain)

『雨月物語』の作者として知られる江戸時代後期の読本作者、また歌・茶人、国学者 上田秋成(うえだー あきなり)の、最晩年の随筆『胆大小心録』の一節に、以下のようなものがあります。

「“唐人を二度見た事とし忘れ”といふ俳句かあつたが、翁は、二度見たが、三度は見る事のならぬ事しやさうな。十五さいの時と、三十さいくらゐの時としやあつた。唐人といふたれば、儒者か韓人しやといふてしかつた事しやあつた。」  
俳句は、老人が朝鮮通信使を二回も見たことがあると自慢話を

をしている様子を詠んだものです。

そして、「唐人」と言ったら、儒学者に正しく「韓人」と言えと叱られたと書かれています。江戸時代の人たちにとって、外国人の姿を見る機会はきわめて稀で、中国と朝鮮を区別せず、朝鮮の人のこともこう呼んでいたことが分かるお話です。

さて、本当に「道興」が二人居て、天和の通信使を治療した記録が残っているのなら、「世界の記憶(世界記憶遺産)」に追加される大発見とされるでしょう。

今回は、随分と長くなってしまいました。最後に、延享の道興が上田秋成の義理の叔(伯)父であったことをお伝えし、そのお話はまたの機会にいたしましょう。

とっちばれ。

● レファレンス申込み及び問い合わせ先

青森県立図書館 参考・郷土室 電話 017-729-4311 FAX 017-762-1757  
電子メール sanko@plib.pref.aomori.lg.jp

# こどものひろば



## 「さわる！めくる！たのしい本」～「しかけ絵本」の世界～

平成 30（2018）年 2 月 24 日から、県立近代文学館で企画展「本の装い展」が開催されます。

児童室でも、1 月 26 日から「さわる！めくる！たのしい本」をテーマに、「しかけ絵本」の展示をしています。

皆さんは「しかけ絵本」といえば、どのような本を思い浮かべますか？県立図書館にも、楽しい「しかけ絵本」がたくさんあります。今回はその中から、2 冊紹介します。

### ●「さわって」たのしい本

ぴよんぴよんぴよん！ふわふわのうさぎが、春の野はらをかけだします。絵をよく見て、触ってみると…。うさぎがふわふわ、もこもこ！うさぎの他にも、ねすみやカワウソ、キツキたち、いろいろな動物に出会い、触れることができます。目で見えて楽しむだけではなく、めくるたびに触りたくなる、あったかい絵本です。この他にも、『ちびくま』など、「さわってあそべるふわふわえほん」シリーズがあります。



#### 『ちびうさぎ』

（キャサリン・アリソン/ぶん ピアーズ・ハーパー/え 栗栖カイ/やく ブロンズ新社 2007）

### ●「めくって」たのしい本

ページをめくっていくと、開くたびに絵本の中のリボンの数が 1、2、3…。めくるたびに、シュルシュルとリボンが増えていく、不思議な絵本です。リボンと一緒に登場する、カラフルなかわいらしい虫たちにも注目です。また、ひっくり返しても読むことができる仕掛け絵本になっています。みんなで数を数えながら、どんな虫が出てくるのか、探してみてください。



『1から10まで …ひっくりかえしてもういちど 2かいもたのしめるリボンがついたしかけえほん』（ベティ・アン・シュワルツ/ぶん スージー・シェイカー/え きたむらまさお/やく 大日本絵画 2008）

他にも、飛び出す絵本や、手紙のついている絵本など、様々な工夫が仕掛けられている絵本があります。「しかけ絵本」は、目で見えて楽しむだけではなく、指で触ったり、引っ張ったりするなど、新しい体験のできる本です。

今回の展示を機会に、驚きがいっぱいあった「しかけ絵本」の世界に触れてみてください。

## 展示のお知らせ

### ◆児童室の展示：「さわる！めくる！たのしい本」

期間：平成 30（2018）年 1 月 26 日～2 月 21 日

こどものへや HP（<https://www.plib.pref.aomori.lg.jp/index.html?id=1>）

### ◆文学館の展示：「本の装い展」

期間：平成 30（2018）年 2 月 24 日～5 月 20 日

近代文学館 HP（<https://www.plib.pref.aomori.lg.jp/viewer/info.html?id=30>）

ホームページで、過去の展示の様子もご覧いただけます。





思想家であり、民藝研究の先駆者である柳<sup>やなぎむねよし</sup>宗悦が監修し、そのほとんどの編集に係わっていた雑誌『工藝』。これは、昭和6年1月から昭和26年1月にわたり120号まで出版された文字通り“工藝”を主題とし、中でも“民藝”を主な題材とした雑誌です。

“民藝”という言葉が誕生したのは、大正14(1925)年のこと。柳宗悦を中心とし、陶芸家の河井寛次郎、濱田庄司らによって提唱された造語です。

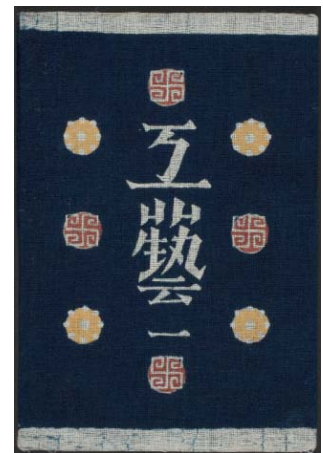
彼らが“民藝”と称したものは民衆の日常生活に即する“工藝”であり、それには美術品に負けない美しさがあることを広めようと展開した文化運動(民藝運動)の機関誌として雑誌『工藝』が刊行されました。第1号の題材は「石皿」で、「民画」「自在」「看板」「茶碗」…と続いています。

柳らは、この雑誌自体を工藝的な作品として読者に届けたいという考えをもっており、装幀には日本の手仕事の美を活かそうとしました。初年の染色家芹澤銑介<sup>せりざわけいすけ</sup>の型染の布を使った装幀について、「今迄も更紗<sup>さらさ</sup>の布表装はあつたが、字と模様とを型染で全部染め出したのは之が抑<sup>そもそ</sup>も嚆矢<sup>こうし</sup>と思ふ」(第1号編輯餘録)と述べています。その後も、多様な手法が用いられています。

内容面で重視したのは、挿絵(写真図版)でした。「(前略)私達はかゝる發言<sup>はつげん</sup>を抽象的ならしめない為に、出来るだけ多くの挿繪<sup>さしえ</sup>によつて、具體的に私達が解して正しいとする美の標本を示すつもりである。」(刊行趣意)とし、図版として何を選び、どう撮影し、どう掲載するかに全力を注いでいます。小間絵(カット)についても、信頼する作家達に作製を依頼しています。棟方志功もそのひとりでした。

今回ご紹介した資料は、こぎん刺し、菱刺し、小絵馬、棟方版画のほか青森県に関することも多く取り上げられており、民藝の歴史や発展の様子を知るうえで重要な郷土資料であると言えます。しかし、出版部数が少なかったうえに、戦災で多くが失われ、今となつては、古書での入手も極めて困難な資料のひとつでした。

うれしいことに、昨年、一般財団法人大坂会(青森市)様より雑誌『工藝』電子版をご寄贈いただくことができました。ありがとうございます。工藝・民藝を研究される方はもちろんですが、挿絵(図版)を見るだけでも楽しんでいただけるものと思います。ご利用お待ちしております。



工藝 1号 表紙



工藝 74号 挿絵  
津軽地方の蓑

## 近代文学館資料の紹介(第29回)

### 企画展「本の装い」展資料から

青森県近代文学館では平成30(2018)年2月24日(土)から5月20日(日)まで企画展「本の装い」展が開催されます。今回は300点を超える展示資料の中から、多彩な技法と色とりどりの装丁が魅力の関野準一郎の資料をご紹介します。

#### ①合羽版絵本『古事記絵巻』

この本は、『古事記』垂仁天皇の段の絵ばなしで、青園<sup>せいえん</sup>荘<sup>そう</sup>の内藤政勝が製本を受けもちました。関野は『木版画の楽しみ』(平凡社 昭和58(1983)年5月16日)の中で、「彼は余人のなし得ないことをする造本家である。」と紹介しています。関野によれば、内藤政勝と話をしているうちに芥川龍之介の『地獄変』を絵物語にしたいという願いが起り、『古事記』垂仁天皇の段の「天皇が兄の城を妃とともに焼き払う地獄図絵」を版画にしようと思い立ち、この本を作ったといっています。

悲しく壮絶なストーリーですが、型紙合羽のステンシル版を用いたこと、当時の白一色の服装では淋しいと、服装を鎌倉時代、城を桃山時代の豪壮な造りにしたことにより、非常に美しい本となっています。



『古事記絵巻』  
(昭和24(1949)年7月10日)

#### ②『故里民話』＜新収蔵資料＞

関野は青森中学卒業後『蟲』という私家本を作って以降、かなりの数の限定私家本を作っています。「私家版ならば、他人の思惑は一切気にせず、自分の欲することだけをやる。売ることなどは考えず、作りたい本を作る喜びは他にかえられない。」と自著の中で述べています。

『故里民話』は、関野自筆の文字を石井寅男が木版に彫り、岩瀬孝市が摺ったもので、各ページの上部に丹緑黄の手彩色絵、下部に○で区切られた昔話が15話収められています。表紙は裏表紙と併せて一枚の多色摺木版画です。



『故里民話』  
(昭和58(1983)年10月23日)

本展では、ご紹介した関野準一郎以外にも棟方志功・佐藤米次郎・蘭繁之・阿部合成・佐野ぬい・村上善男の装丁本を展示しています。装丁者の想いや、著者とのエピソードについても紹介します。この機会にぜひご覧いただきたいと思います。入場は無料です。

# カウンターからひとこと(第28回)



今回は、“雑誌のバックナンバー”についてお知らせします。

## ◆雑誌のバックナンバー貸出について

最新号の雑誌は、一般閲覧室正面入口の北側に配架しています。

最新号でなくなった雑誌(バックナンバー)は右のように書庫で保管しています。このうち、永年保存の雑誌は館内でのみ閲覧できます。

永年保存でない雑誌については、1週間以内の期間で貸出できます。

別途申請が必要ですので、貸出を希望する場合は、カウンター職員にお話してください。



## ◆貸出した雑誌の返却について

これまで、貸出した雑誌は、破損しやすいため、ブックポストに返却できませんでしたが、貸出時にカウンターの職員にお話しいただければ、**ブックポストへの返却ができることになりました!**



雑誌は、「特別貸出用返却袋」と明記された赤い袋に、貸出票とともに入れて貸出します。

返却の際は、雑誌と貸出票を袋に入れて、返却期限までに直接カウンターにお持ちいただくか、県立図書館正面または新町ブックポストへご返却ください。